

圭陵會報



発行所／岩手医科大学圭陵会 〒020-8505 盛岡市内丸19-1 TEL 019-651-5111 FAX 019-624-8380 E-mail info@keiryokai.gr.jp URL http://www.keiryokai.gr.jp
 題字／三田定則 先生書 発行人／齋藤和好 編集人／前沢千早 印刷所／山口北州印刷

目次	創立120周年記念式典・祝賀会……………	1	圭陵会だより……………	23	3学部合同セミナー・	
	教授就任のご挨拶……………	6	支部だより……………	25	圭陵会主催懇親会……………	39
	看護学部の講座と教授の紹介……………	13	医学部同窓会だより……………	27	医学部学生会優秀演題賞受賞……………	40
	平成29年度入学者……………	18	歯学部同窓会だより……………	29	馬術部新馬購入のご報告……………	40
	平成30年度大学入試概要……………	20	トピックス・FAX ニュース……………	33	大学人事……………	41
	科研費申請・採択状況……………	22	歯学部学業奨励奨学生表彰式……………	38	お祝い・ご逝去・編集後記……………	42

岩手医科大学創立120周年記念式典・ 記念祝賀会を挙げる

【岩手医科大学報 第488号より一部掲載】

岩手医科大学創立120周年記念式典



平成29年4月20日（木）、岩手医科大学は創立120周年の記念すべき日を迎え、岩手県民会館、盛岡グランドホテルにおいて創立120周年記念式典並びに祝賀会を挙行しました。

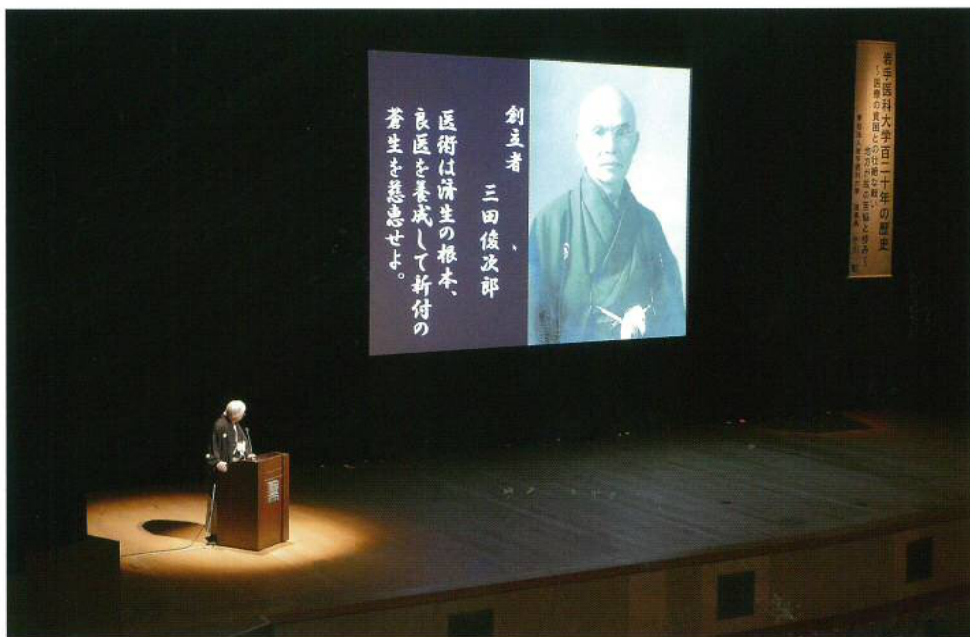
当日は、記念式典に来賓、招待者、同窓生、本学教職員、一般の方々810名、祝賀会には636名の出席を賜り、盛会裏に終了いたしました。

記念式典

岩手県民会館で行われた記念式典は、午後2時、司会を務めるエフエム岩手アナウンサーの鈴木清恵さんの開式の辞で始まり、国歌斉唱に引き続き小川彰理事長が式辞を述べました。その後、ご来賓の松野博一文部科学大臣(代読：常盤豊文部科学省高等教育局長)、達増拓也岩手県知事、寺野彰日本私立医科大学協会会長(学校法人獨協学園理事長)からご祝辞を頂きました。祝電も数多く寄せられ、その中からハーバード大学 John D Da Silva 歯学部長、塩崎恭久厚生労働大臣からの祝電が披露されました。続いて小川彰理事長が「岩手医科大学 120年の歴史～医療の貧困との壮絶な戦い 地方が故の苦悩と歩み～」と題し、記念講

演を行いました。医療の貧困解消を目指し戦って来た先人の思いを胸に、地方にありながらも日本・世界に発信する大学への発展を目指していくことを講演を通じて伝え、県民・国民の健康を守る防人となって努力することを約束し講演を終えました。

その後、祝賀演奏として岩手医科大学管弦楽団による「ニュルンベルクのマイスタージンガー前奏曲」が披露されました。迫力のある演奏の余韻が残る中、最後に管弦楽団の演奏と合唱団による校歌の斉唱が行われ記念式典は閉会となりました。



小川理事長記念講演

※小川理事長による記念講演の動画を岩手医科大学 HP に掲載していますのでご覧ください。



岩手医科大学管弦楽団による祝賀演奏



会場の様子(校歌斉唱)

本日ここに、文部科学大臣殿、岩手県知事殿をはじめ、各界から多くの来賓各位のご臨席を仰ぎ、岩手医科大学創立120周年の記念式典を挙げてまいりますことは、本学にとりまして誠に光栄であります。

さて、本学の歴史は「医療の貧困」と「医術は済生の根本とする理想」との壮絶な戦いでした。と同時に「金銭的貧困」と「国民の生命を守る責務」との戦いでもありました。120年の歴史を繋いでこられたのは奇跡と言って良いでしょう。創立者の理想はもとより各年代でご努力されてきた多くの先人の熱い思いによるものと、心より敬意を表すものであります。

明治の医師養成は、明治20年の勅令により、全国の多くの医学校が廃校となり、その後の地域医療の荒廃は目に余るものでありました。特に、北東北・北海道には医育機関は一枚のみとなり、多くの住民が病に倒れ、衛生状態の悪化により、トラコーマが蔓延し失明に至るものも数多く、悲惨な状況を呈していました。

それを憂いた創立者の三田俊次郎は、120年前明治30年の今日、私財を投じて私立岩手病院を設立、同時に医学講習所（私立岩手医学校に発展）、産婆看護婦養成所を併設し、「医術は済生の根本、良医を養成して新附の蒼生を慈恵せよ。」と宣言し、北東北・北海道唯一の医育機関を創設したのです。これが本学の源であります。

その後、歴史の変遷により私立岩手医学校は明治45年一時廃校の憂き目にもあい、存続の危機を迎えました。医療の貧困とこれらの危機と戦い昭和3年には念願の私立岩手医学専門学校の設立を実現させ、医育機関を再興させたのです。本学の学是は「医療人たる前に誠の人間たれ」であります。医療人である前に豊かな人間性、社会性を持った有能な人材を育成するというこの精神は、今日まで脈々と伝承されております。

昭和17年、俊次郎は台北帝国大学総長に就任していた我が国の法医学、血清学の始祖三田定則を、岩手医学専門学校第二代校長に充て、昭和22年には大学への昇格を果たしました。こうして本学は、地域医療に密着した私立医科大学として揺るぎない地位を確立していったのであります。

その後、昭和40年、東北・北海道で初めてとなる歯学部を設置しました。本学は、県都盛岡市の中心、内丸地区にキャンパスを構えてまいりました。しかしながら、施設の老朽化と最先端の教育、医療、研究を行うには狭隘となったため、盛岡市の南方約8キロ郊外の矢巾町に新キャンパスを開設しました。平成19年には薬学部を設置、新時代の薬剤師の育成に努めてまいりました。また、本年には看護学部を新設しました。これにより、将来医師、歯科医師、薬



剤師、看護師を目指す学生が学生時代から顔の見える環境で学ぶことが出来る大学を目指しています。

一方、6年前の平成23年3月11日に発生した東日本大震災津波では、本学は岩手県と連携し、県全体の災害医療活動をリードし全国からの全ての医療チームを把握し、効率よく各避難所に配置するなど、災害時における医療の一元管理のモデルを確立した他、医療チームの派遣等、全職員が一丸となって獅子奮迅の活躍をしたものと自負しております。

震災時には、全国の関係団体及び個人の皆様より、心温まる支援を数多くいただきましたこと、この場をお借りして厚く御礼を申し上げる次第です。

また、本学の歴史の中でも大事業となる、新附属病院の矢巾キャンパス移転は、平成31年秋の開院に向けて建設に着手しました。震災の教訓から外部からのエネルギー供給が途絶えた場合でも、1週間は自力で全ての病院機能の維持が可能なエネルギー供給システムを導入した災害に強い世界にも類のない画期的な病院となります。また、現在地は内丸メディカルセンターとして、外来中心の高規格病院として整備する予定です。

以上のように本学が幾多の存続の危機を乗り越えながらも、ここに120年の歴史を刻むことができましたのは、ひとえに教職員、卒業生、ご父兄はもとより、ここにご参会の方々をはじめ各界の多くの方々のご温かいご指導、絶大なるご協力、ご支援の賜であり、重ねて衷心より敬意と感謝を表すものであります。

私ども教職員・学生一同は一丸となって、創立120周年を機に、創立者をはじめ先人たちが築いた建学に当たったの高邁な理想に今一度回帰し、将来に向けて新たな発展を期し輝かしい歴史を創ってゆく所存です。

結びに、本日はご多用のところ、御臨席賜りました数多くの関係の皆様に対し厚く御礼を申し上げますとともに、今後とも倍旧のご指導、ご鞭撻、ご支援を賜りますようお願い申し上げます。式辞といたします。

記念祝賀会

記念式典終了後、盛岡グランドホテルに会場を移し記念祝賀会が行われました。午後5時、小林誠一郎副学長の開会の挨拶で始まり、大学を代表し祖父江憲治学長が記念式典を無事に挙げてきたことへの感謝と「本学建学以来の根幹である地域に根ざした医療をさらに発展させ、地域から日本、世界に飛躍する大学を引き続き目指してまいります」と今後に向けた決意を述べました。その後、ご来賓の小川秀興医学教育振興財団理事長（学校法人順天堂理事長）、河田悌一日本私立学校振興・共済事業団理事長よりご祝辞を頂きました。続いて行われた鏡開きでは、ご来賓、関係者総勢25名が登壇し、司会者の掛け声に合わせて会場の招待客も一体となって唱和し盛大な鏡開きとなりました。

齋藤和好岩手医科大学同窓会会長の乾杯で祝宴の幕が開き、「森川ともゆきとタンゴ・アンサンブル」による生演奏と本学の歴史120年を振り返るDVDが上映され、リラックスした雰囲気の中、歓談となりました。

盛況の中、最後は、三浦廣行副学長が中締め挨拶を述べ、酒井明夫副学長の閉会の挨拶により記念祝賀会は閉会となりました。

岩手医科大学 祖父江 憲治 学長挨拶



先程は、文部科学大臣様、岩手県知事様、私立医科大学協会会長様をはじめ、来賓多数のご来臨を賜り、お陰様を持ちまして岩手医科大学創立120周年記念式典を挙げてまいりました。この場をお借りして厚く御礼を申し上げます。

記念式典の中で小川理事長から説明させていただきましたとおり、本学はこれまでの120年の歴史において、医療の困窮と理想の狭間で、もがき苦しみながらもそれを乗り越え、まさに苦節120年の歴史を経て今日に至りました。この長い歴史の中でも今こそ激動の変遷期を迎えております。

創立120周年記念事業として展開してまいりました看護学部設置、矢巾新附属病院建設並びに内丸メディカルセンターの整備のうち、看護学部につきましては、お陰様をもちまして、この4月に開設し、先週初めに入学式を行い、記念すべき第1期生を受け入れたところであり、また、矢巾新附属病院の整備につきましては、平成31年秋の開院を目指し、今月初めより建設工事に着手したところであり、今後、矢巾新病院の建設に合わせ盛岡市内にあります現病院の移転に向けた準備を加速してまいります。更に新附属病院開院後には内丸メディカルセンターの整備を含めた内丸地区再開発を控えるなど、大きな事業が目白押しとなっております。

一方、教育・医療を取り巻く環境は、少子化に伴う受験者数や入学定員の減少、医師偏在化の拡大、新設医科大学、医療費マイナス改定をはじめ激変する医療関連施策などは、年々悪化傾向にあり、喫緊の課題が山積しております。今こそこの生みの苦しみを突破し、岩手医科大学の更なる発展と飛躍の基盤を造り、大学運営を行っていく所存であります。

本学は開学以来、岩手県唯一の医科大学、更には医療系総合大学として、岩手県のみならず、北東北の医療を担ってまいりました。これまで実績を積み上げてまいりました本学の特色を活かし、私学ゆえに成し得る本学独自の50年、100年、更にはその先を見据えた磐石な基盤造りが重要と考えております。

本学における変遷期において、大学の器造り、この中で活躍する人造り、そしてこれを支える組織造りの3つの造りが重要であると考えます。矢巾新附属病院と内丸メディカルセンターの開設が器造りであり、時代の変化に即応した大学運営の合理化と経営改革、更にこれを支える組織造りを迅速に行い、この器の中で活躍するより多くの医療人を育成、即ち人造りを行ってまいります。

云うまでもなく、医療系総合大学である本学の使命は、教育・診療・研究であります。医・歯・薬の3学部に加えて今年度からは看護学部を含め各学部の特色を生かしつつ、本学の大きな特色である4学部同一キャンパスで学生時代からチーム医療を涵養出来る教育環境を育むと同時に、診療・研究の充実をはかり、岩手県更に、北東北・東北の医療を担う責務がございます。本学創設以来の根幹である地域医療に根ざした医療を発展させ、地域から日本、世界に飛躍する大学を引き続き目指してまいりたいと考えております。

本日ご臨席の皆様には、本学の更なる発展、飛躍のため、今後とも変わらぬご指導、ご支援を賜りますよう、お願い申し上げます。私の挨拶とさせていただきます。



圭陵会 齋藤 和好 会長 乾杯挨拶

皆様、本日はお忙しいところお集まりいただきありがとうございました。

120年前、創立者三田俊次郎先生のお話しになられたこと、つまりチーム医療あるいは医療の本来のあり方ということを考え、そして先程の小川理事長先生のすばらしい記念講演にも思いを添えて、そして同窓会員1万余名の方々とともに世界に冠たる岩手医科大学にするべく頑張りたいと思いますので、どうぞ皆様のご支援をよろしく願いいたします。(乾杯)



岩手医科大学創立 120 周年記念誌の頒布について

■主な内容■

あいさつ

学校法人岩手医科大学 理事長 小川 彰
岩手医科大学 学 長 祖父江憲治

祝辞

岩手県知事 達増拓也 氏
学校法人順天堂 理事長 小川秀興 氏
小岩井農牧(株) 代表取締役 熊澤道彦 氏

巻頭特別対談

「岩手発 日本の医療を考える」
国際ジャーナリスト 堤 未果 氏
学校法人岩手医科大学 理事長 小川 彰

建学の精神

学是 医療人たる前に、誠の人間たれ
ヒポクラテスの樹
校章・シンボルマーク
俊次郎・定則の顕彰、他

期別年史

第1章 草創期【明治30年～昭和2年】
第2章 黎明期【昭和3年～昭和17年】
第3章 揺籃期【昭和17年～昭和30年】
第4章 拡充期【昭和31年～昭和62年】
第5章 発展期【昭和63年～平成15年】
第6章 躍進期【平成16年～平成28年】

特集

I. 東日本大震災
II. 絵ハガキで辿る医大史
III. 名物教授列伝
IV. 部活動史
V. 圭陵会史



同記念誌は2,000円（税込）にて、下記により頒布致します。

- ゆうちょ銀行の「払込取扱票」による購入
 - 電話・メール等で創立120周年記念事業事務室に購入申込
 - 同室より「払込取扱票」を郵送
 - 「払込取扱票」により指定された大学の口座に入金
 - 入金確認後、同室より記念誌を郵送
- 岩手医科大学の内丸及び矢巾キャンパスの丸善売店にて購入（同店に記念誌を常備しております）
内丸店（ダイヤルイン 3311）、矢巾店（ダイヤルイン 5306）

担当

〒020-8505 盛岡市内丸19-1
岩手医科大学 創立120周年記念事業事務室
電話 019-651-5110（ダイヤルイン 7022）
Fax：019-624-1231
mail：anniv@j.iwate-med.ac.jp